

電子企画

い し ん て ん し ん 異身転心

～自分と違う身体に戸惑い～

人から人へ

多重人格 科学技術

性が変わる

身体が変わる

人から人へと姿が変わる

自分は何者か

問い続けなければならない

それは時に痛みを伴う



Serial experiments lain

監督 中村隆太郎

制作 トライアングルスタッフ

関連作品 湯浅政明『カイバ』

アニメ



■ 他者との関わりⅡ「繋がり」の再認識を促す舞台装置

iMacが発売された一九九八年に『Serial experiments lain』（以後lain）は放映された。当時の深夜枠で存在感を放ったこのアニメは、世紀末の中で興隆するネットと人間の関わりを、手探りで描こうとしたところがある。

人は他者と関わりを持たずに生きることは難しい。言い換えれば、依存せずに生きていくことは困難だ。『E』では「繋がり」が二つの世界「現実の世界」と「ネット」を舞台上に描かれる。

ネットにおける「繋がり」の特殊性とは何なのか。なぜネットで繋がる人間が、実際の世界では繋がっていないのか。この現実世界とネットの境界線を破壊する存在がいるとすれば、現在私たちが認識している世界はどのように見えるのだろうか。玲音がコンピュータ操作にのめり込んでいくうちに、私たちの認識では理解できない現象が次々と起きていく。玲音に似た人を見るという声がどんどん増えていくのだ……次第に玲音自身も、自分の人格が他人との繋がりが次第で変わっていることを認識させられる。

人を選ぶアニメという評価が多いが、『E』の問題提起は現代でもなお通用するものが多い。【沖黍州】

ネ
ッ
ト

存 在 論



すわっぷ⇔すわっぷ

著者 とめきち
発行 まんがタイムきららキャラット
関連作品 タチ『桜 Trick』

漫画



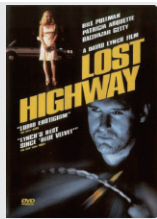
■ (便利さには) 勝てなかったよ……

遅刻しそうでパンくわえながら走る女の子が曲がり角で誰かとぶつかるといふ出典は分らないが王道の展開で始まる本作。王道と異なるのは、ぶつかった相手がクラスメイトの女の子であり、ぶつかった際にキスをしてしまい、そして人格が入れ替わってしまったところだ。そう、本作はキスをしたら入れ替わってしまう二人の女の子を描いた百合日常SFなのである。この設定と絵柄に惹かれた人は読んで外れはしないだろう。本作で入れ替わる主役の少女は、クラス一頭が良いが、ふくよかな胸に憧れる一之瀬春子(ちっさい)と、ギャルっぽい性格好だが中身はピュアな二階堂夏子(おっさい)のご二人。後々でキスで入れ替わるもう一カップル(そちらは百合度が高い)が登場するが、この二人がメインで話が描かれる。

そんな本作の特徴は入れ替わりの便利さのためにキスをするということだ。自分の服装をチェックしたり、バイトを変わったり、おっさい胸の感覚を味わったりするためにキスをして入れ替わる。学校で、家で、試着室で、水中で……日常的にキスをする。ピュアな夏子は春子とのキスに抵抗がなくなっていることにショックを受け、もう入れ替わらないと決意するが、それでも便利さに負けてしまう。誘惑に屈する夏子や、入れ替わって夏子のふくよかな胸を味合う春子の姿は可愛らしく、読んでいて楽しい。また、入れ替わる際の見分けとして、春子の人格が入っている時は目の光沢がない状態(いわゆるレイプ目)にすることで、どっちがどっちなのか分からないということをやさくしてあり、漫画として読みやすくなっている。キスシーンに関しても、あの怪作『桜 Trick』ほど濃厚で衝撃的ではないが、ほぼ毎回安定して描かれており、安心感がある。

それでいて、当然と言えば当然か、徐々にキスする中で二人の関係も変化していく。最初はただのクラスメイトであり、お互いに苗字で呼び合っていた二人が名前前で呼び合う関係になる。それまで接点がほとんどなかった二人があることがきっかけで仲良くなっていくというのはベタではあるものの、それまで友達の間になかった春子が夏子や彼女の友達たちと仲良くなっていく姿はほつこりする。そして、いつしか更なる仲になつていくのではと予感させる。今のところまだ好意によらないキスなので、百合的には物足りなさを覚えないこともないが、キスを重ねていくことで、便利さのためのキスから特別なキスへと変わっていくことを期待したい。

【nooky】



ロスト・ハイウェイ

監督 デヴィッド・リンチ

制作 パラマウント ホーム エンタテインメント ジャパン

関連作品 同監督『マルホランド・ドライブ』

海外映像

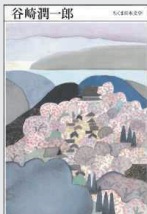


■ 窮地に立つ男の〈飛躍〉

難解な映画ばかり撮ることで知られるリンチの作品だけど、冒頭のデヴィッド・ボウイにやられたら、まあ最後まで見て欲しい。「これってSFか？」という声が聴こえるけど無視しよう。

妻を惨殺した罪で死刑を宣告されたサククス奏者が、刑務所の中で、一夜にしてまったく別の人間に变身してしまった…… 不可解極まる演出・展開ばかりのこの映画のなかでもっとも不条理なのはこの〈変身〉であろう。それはまさしく、「全く不可能なこと」としての変身である。それは共通項のないもの同士の間接であり、映画の構造においては、ほとんど不連続な前半部と後半部をつなぐ蝶番のようなものだ。それはたぶん、「変身」という概念がもちうるある側面、すなわち〈飛躍〉なのである。

リンチの映画の良いところは、象徴は決して何らかの事実を指示しないということだろう。「この象徴の意味はなんだろう？」と問うことは多くの場合ナンセンスであり、他の象徴へと参照される移り行きの中で物語が浮かび上がるのを眺める他ない。あの〈変身〉もまた、主人公の妄想だったのではないかと問うのはやめにした。だってこの映画の中では喉笛を掻き切られてもなお言葉は発せられるのだから。【立花有理】



ともだ まつなが はなし 友田と松永の話

著者 谷崎潤一郎

発行 ハヤカワ文庫 SF

関連作品 同著者『刺青』

国内小説



■ 太った知人と痩せた夫

ある日、しげ女という婦人から主人公のもとに手紙が届く。失踪した夫のカバンに友田銀蔵宛てに主人公が送った手紙が入っていたらしい。夫の名前は友田銀蔵などという名前ではないし、同封されている夫の写真は銀蔵とは似てもつかない風貌である。相撲取りのような友田銀蔵と病人のように痩せた夫・松永儀助。気になった主人公が調べると、銀蔵は数年周期で足取りがわからなくなっており、銀蔵がいない時に儀助が現れていることが発覚した。銀蔵は自分がその儀助なる人物とは全く関係ないことを主張するが、主人公の疑いは次第に深まり、調査を進めるのだった。

話が進む中で、友田銀蔵と儀助が同一人物だということは、銀蔵の反応から知ることができるものの、ミステリーとしても十二分に読者の好奇心をそそる。

この物語の本質は儀助と銀蔵に変貌を繰り返す彼のアイデンティティのあり方にある。西洋式の生活に恋い焦がれ、食欲と色欲に塗れ、妻のいないところで豪奢な生活を送る自分と純日本式の生活を好み、感傷的になつていく自分との板挟み。故郷へのコンプレックスから始まったそのアンビバレントな思いが人間の体型に変化を及ぼすとはとても興味深い物語である。

【ビート板】

夏



あさつての方向。

原作 山田J太
監督 桜美かつし
制作 J.C.STAFF

アニメ



■ 明日を飛び越えてあさつてに行ったり

時間SFといえば夏のイメージが強い。それは、天気や、お祭り、蝉の音などで時間が移り変わる様を一番感じ取れる季節だからかもしれない。

本作『あさつての方向。』もそんな夏が舞台の時間に関する作品だ。原作とアニメで別物といえるくらいストーリーが違っが、ここではアニメ版を紹介していきたい。本作では小学生の女の子五百川からだとかのだの兄・尋の元カノである野上淑子の年齢が入れ替わり、子供が大人に大人が子供になるという変身を描いている。

実はからだと尋は血が繋がってはいないので、義妹と元カノという刃傷沙汰にも、ラブコメっぽい内容にもできそうな設定である。しかしながら、本作はそのどちらにも行かない。第一話のラストで変身が描かれた後には丸一話かけて、変身直後の一日を、その次の話では二人の新しい生活を描くというように、変身という非日常後の日常を丁寧に描いている。

日常の描き方で本作がとりわけ優れているのは突然大人の身体になってしまった五百川からだの仕草・振る舞いだ。小学生時は赤ランドセルが似合う小柄な女の子だが、大人の姿は巨乳である。姿が変わってナイスバディになるのは定番だが、本作ではそれを露骨なサービスとして見せるのではなく、階段を上った後の水を飲むシーン(第5話)や、ケーキを作るシーン(第1話)においてさりげなくエロい仕草を見せている。そうした派手ではないが丁寧な仕草を積み重ねることで、キャラクターを魅力的に描いている。

そうした大人となった姿とは裏腹に中は子供なからだ。彼女は自分のために色々なことを犠牲にしてきた尋に申し訳なさを感じ、早く大人になりたいと思っていたのだ。そんな彼女は尋と淑子の過去を知って自分のせいで二人が別れたことに責任と罪悪感を抱き、家を出して行方不明になる。それをきっかけに、お互いのことを想っていないながらも、言葉にできなかつた三人たちの関係が変化してい

く。結末は爽やかで、収まるべきところに綺麗に着地ができています。派手な作品ではないが、作画と音楽のクオリティも高く、見て損はない作品だと思います。【moky】